

SENSE ISLAND／LAND | 感覚の島と感覚の地 2024

無人島・猿島に加え横須賀のまちにエリアを広げ2年ぶりに開催



2019年に横須賀の無人島猿島でスタートした「Sense Island - 感覚の島 - 暗闇の美術島」。夜の静寂と暗闇を感じながら、島に点在するアート作品を通じて人間本来の感覚を呼び覚ますことを目的に、開催を続けてきました。本年は、昨年のリサーチイヤーを経て、猿島だけでなく横須賀市街地にもエリアを大幅に拡げ、「Sense Island」から「SENSE ISLAND／LAND」としてアップデートし、夜間だけではなく日中も楽しめるアートイベントとしてリニューアル開催いたします。

横須賀は、江戸時代はペリー来航の地として、第二次世界大戦時には要所を守る重要な役割を果たす地として、そして現在はアメリカの文化が交差する地として知られています。私たちは、さまざまな歴史、文化、産業が積み重なる横須賀の「地層」に着目し、アートによる時間と大地の可視化と文脈化を「SENSE ISLAND／LAND」で試みようとしています。

横須賀には、東京湾最大の無人島である猿島や日本最初の洋式燈台として知られる観音崎灯台のある観音崎公園、現存する世界最古の鋼鉄戦艦・世界三大記念艦「三笠」のある三笠公園などの歴史的要所の他に、2024年にプリツカー賞を受賞した世界的な建築家 山本理顕氏が設計した横須賀美術館や昭和の街

並みが残るエリアなど文化的拠点も数多く存在しており、「SENSE ISLAND/LAND」の新たな会場として検討しています。

ぜひ「SENSE ISLAND/LAND」にご来場いただき、アートを通して、日常とは異なる、より特別な横須賀の魅力をお楽しみください。

開催概要

タイトル | SENSE ISLAND/LAND | 感覚の島と感覚の地 2024

会 期 | 2024年10月26日（土）～12月15日（日）

猿島会場：金土日及び祝日の夜間

市街地会場：会期中の日中（各施設の利用時間に準ずる）

内 覧 会 | 2024年10月25日（金）

※荒天の場合は中止し、10月26日（土）に招待者ツアーを実施

会 場 | 猿島および横須賀市街地（神奈川県）

主 催 | 横須賀市、Sense Island実行委員会（横須賀集客促進・魅力発信実行委員会、株式会社アブストラクトエンジン、株式会社トライアングル）

プロデューサー | 齋藤 精一（パノラマティクス主宰）

キュレーター | 青木 彬（インディペンデント・キュレーター）

アーティスト | ARu（松島 宏佑/雪野 瞭治/藤本 雅司）、碓井 ゆい、菊池 宏子、キョウチヨメ、齋藤 精一、SIDE CORE、玉山 拓郎、チェ・ジョンファ、TOKYO PHOTOGRAPHIC RESEARCH（濱本 奏/前田 梨那/松原 茉莉/山本 華）、水戸部 春菜、三原 聡一郎、薬王寺 太一、山本 愛子 他予定

パフォーマンスアーティスト | asamicro、梅川 壺ノ介、オル太、寺尾 紗穂、灰野 敬二 蓮沼 執太

関連イベント | 順次発表予定

チケッ ト | 9月中下旬に販売開始予定

料 金 | 9月中に発表予定

※市街地会場でのアート作品の鑑賞は無料で、鑑賞チケットも不要

WEBサイト | <https://senseisland.com/>



Sense Island のこれまでの展示風景

全体に関するお問い合わせ | Sense Island 実行委員会事務局 横須賀市文化スポーツ観光部企画課
046-822-8427 [平日 9:00—17:00] senseisland@gmail.com

広報に関するお問い合わせ | 株式会社いろいろ press@iroiroiroiro

広報用画像はこちら <https://x.gd/UouqR>

プロデューサーメッセージ

横須賀は、なぜいまのかたちになったのか？そして、なぜペリーが来航したのか。なぜトンネルが多いのか。なぜ基地のある軍港都市になったのか。

それらの答えは、まちの地層を掘り起こし、地勢ともう一度対峙することで見えてくる。

一方で、地域で創造されるアートにはどんな力があるのだろうか？

アーティストの力で生まれた作品は、当たり前を感じる風景に新しい意味を与えてくれる。

2019年に暗闇の無人島・猿島を舞台に始まった、アートを通じて人間本来の感覚を取り戻す試みである「Sense Island -感覚の島- 暗闇の美術島」は、数年の開催を経て今年2024年から、猿島だけではなく横須賀市街地に、夜間だけではなく日中に拡張して開催することになりました。

数万年かけて創られた地球や大地の一部としての横須賀の地形と、数百年前から脈々と受け継がれる横須賀の様々な産業と、近年起こりうるであろう環境や地域の変化を、アート作品というレンズを通して、横須賀の地で見つめ直す試みが「SENSE ISLAND/LAND | 感覚の島と感覚の地」です。

「SENSE ISLAND/LAND」を通して、人間誰もが持つSENSE=感覚を最大限に引き出し、横須賀の地層や地勢が積み上げてきた多様なSENSE=感性を、横須賀の様々な場所で感じていただければと思います。

SENSE ISLAND/LAND プロデューサー
齋藤 精一（パノラマティクス主宰）



ゲストキュレーターメッセージ

横須賀という地名から想起される様々な事象—造船や軍港、はたまたスカジャンまで—は、当然のことながらまた異なる事象との複雑な絡み合いのなかでかたちづくられてきました。地域におけるそんな多層的な繋がりをひも解くために「SENSE ISLAND/LAND」では、地層そして地勢をテーマに、私たちが立っているこの大地へと目を向けていきます。

その眼差しは既に積み重なった歴史を知るだけでなく、その大地の上にこれから私たちがどのような未来を創造していくのかという問いへと続くでしょう。アーティストたちは横須賀の風景や歴史に作品を重ねて時に大胆に、またはやわらかく機微をとらえながら、その問いに応えるための補助線を引いてくれるはずです。

そして「SENSE ISLAND/LAND」が来場者一人一人の主体性を呼び覚まし、地域と共により豊かな創造性を育む機会となることを願っています。

SENSE ISLAND/LAND キュレーター

青木 彬（インディペンデント・キュレーター）

プロフィール

一般社団法人藝とディレクター。1989年東京都生まれ。東京都立大学インダストリアルアートコース卒業。アートを「よりよく生きるための術」と捉え、アーティストや企業、自治体と協働して様々なアートプロジェクトを企画している。これまでの主な活動にまちを学びの場に見立てる「ファンタジア!ファンタジア!—生き方がかたちになったまち—」（墨田区、2018〜）ディレクターなどがある。



デザインコンセプト

横須賀という土地やアートを通じて感覚を呼び起こすというテーマをもとに、感覚的で海との親和性の高いモールス信号をモチーフに表現しました。情報を受け取る人との距離によって、抽象的な形状と文字とのバランスが変わり、情報伝達速度に変化が生まれるデザインシステムになっています。

木村 浩康（Rhizomatiks / Flowplateaux アートディレクター / Webデザイナー）

SENSE ISLAND/LAND 参加アーティスト一覧

アーティスト

ARu (松島 宏佑/雪野 瞭治/藤本 雅司)

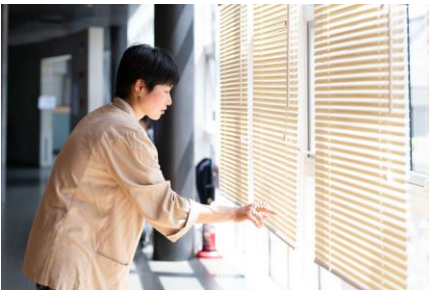
A R u

ARu (ART REALITY UNVEILED) という名称は、アートを通じて普段見えない・聞こえない・認識できない現実を顕わにするという哲学を意味しています。ARUは、SCIENCE, ART, SPIRITUALITYの交わりから「ないものを、あるものに」することで、世界への認知変容をもたらす芸術体験を届けるクリエイティブチームです。

<https://studio-aru.co.jp>

<https://www.instagram.com/aru.inc.official/>

碓井 ゆい



撮影：中尾 あづさ

1980年東京都出身、現在埼玉県在住。ジェンダーや労働といった社会制度や近現代日本の歴史への批評を、刺繍やパッチワーク・キルトといった手芸技法や、生活用品やファウンドオブジェを用いた立体作品・インスタレーションを通して表現する。

<https://yuiusui.com/>

菊池 宏子



撮影：木暮 伸也

アーティスト。東京都生まれ。1960年代のアメリカにおける前衛芸術運動、パフォーマンスアートの影響を強く受けている。現代社会における環境・状況のコンテキスト化をテーマに、コミュニティ・エンゲージメントに焦点を当てたプロジェクトを国内外で多数手がける。

<https://www.kikuchihiroko.com/>

キュンチョメ



ホンマエリとナブチのアートユニット。2011年の東日本大震災を機に結成。芸術は「新しい祈りの形」であると捉え、世界各地で、詩的でユーモラスな作品を制作している。近年の主な展覧会に「六本木クロッシング2022：往来オーライ！」(森美術館 東京)、「現在地：未来の地図を描くために [1]」(金沢21世紀美術館 2019)、「あいちトリエンナーレ2019」(愛知) などがある。

<https://www.kyunchome.com/>

https://x.com/kyun_chome

<https://www.instagram.com/kyunchome/>

齋藤 精一



Photo: Muryo Honma (Rhizomatiks)

1975年 神奈川県生まれ。建築デザインをコロンビア大学建築学科で学び、2006年、株式会社ライゾマティクス (現：株式会社アブストラクトエンジン) を設立。2020年に地域デザイン、観光、DX等を手がけるデザインコレクティブ「パノラマティクス」を結成。2023年よりグッドデザイン賞審査委員長。

<https://panoramatik.com/>

<https://www.instagram.com/panoramatik/>

SIDE CORE



撮影：濱田 晋

2012年より活動を開始。メンバーは高須咲恵、松下徹、西広太志。映像ディレクターとして播本和宜が参加。公共空間におけるルールを紐解き、思考の転換、隙間への介入、表現やアクションの拡張を目的に、ストリートカルチャーを切り口として「都市空間における表現の拡張」をテーマに屋内・野外を問わず活動。

2024年12月8日(日)まで東京、外苑前にあるワタリウム美術館にて「SIDE CORE 展 | コンクリート・プラネット」を開催中。

https://www.instagram.com/side_core_tokyo/

玉山 拓郎



Photo courtesy: SONY

1990年、岐阜県生まれ。愛知県立芸術大学を経て、2015年に東京藝術大学大学院修了。身近にあるイメージを参照し生み出された家具や日用品のようなオブジェクト、室内空間をモチーフに、鮮やかな照明や映像、音響を組み合わせたインスタレーションを制作。空間に対し作品を大胆に介入させることによって、鑑賞者の身体感覚や知覚へと揺さぶりをかける。近年の主な展覧会に、愛知県美術館 (2020)、ANOMALY (2021、2023)、豊田市美術館 (2020) など。2025年には豊田市美術館で個展開催予定。

<https://www.instagram.com/takurotamayama/>

チェ・ジョンファ



1961年、韓国生まれ。同在住。韓国を代表する現代アーティスト。アート・ディレクションやインテリア・デザインも手がけ、多様な分野で国際的に活躍する。2018年平昌パラリンピックでは開・閉会式のアートディレクターを務めた。日本で主な展覧会に横浜トリエンナーレ(2001)、ヴェネチア・ビエンナーレ(2005)、チェ・ジョンファOK!展(2009 十和田市現代美術館)、瀬戸内国際芸術祭(2013)ほか、世界各国での個展、グループ展多数。

<http://choijeonghwa.com/>

https://www.instagram.com/choijeonghwa_official/

TOKYO PHOTOGRAPHIC RESEARCH (濱本 奏／前田 梨那／松原 茉莉／山本 華)

TOKYO PHOTOGRAPHIC RESEARCH

東京フォトグラフィックリサーチ (TPR) は、写真家・小山泰介を中心に、広く写真表現に携わるアーティストや研究者からなるアーティスト・コレクティブ。「都市の多角的なリサーチ」や「現代写真の実践的な探求」、「写真文化の発展的な研究」などを主なミッションとして、未だ見ぬ都市と社会と人々の姿を可視化し、見出されたヴィジョンを未来へ受け継ぐことを目的としている。今回は小山泰介(ディレクター)、金秋雨(キュレーター)、築山礁太／河原孝典(アーティストサポート)とともに、4名のアーティストが作品を発表する。

<https://tokyophotographicresearch.jp/>

<https://www.instagram.com/tokyophotographicresearch/>

水戸部 春菜



1995年、神奈川県生まれ。状態の記録や保存をテーマに、人間の行動や、社会的背景による痕跡が残った風景や建物の潜在的なリアリティを求めたインスタレーションやドローイング作品を制作している。近年は横須賀市に在住し、谷戸地域に埋まる鉄や銅などの廃棄物を採集し柔らかいものへと加工しながら作品化している。

<https://www.mitobeharuna.com/>

<https://x.com/mitobeharuna>

<https://www.instagram.com/mitobeharuna/>

三原 聡一郎



撮影：山本紉 写真提供：青森公立大学国際芸術センター青森

世界に対して開かれたシステムを提示し、音、泡、放射線、虹、微生物、苔、気流、土、水そして電子など、物質や現象の「芸術」への読みかえを試みている。2011年より、テクノロジーと社会の関係性を考察するためのプロジェクトを国内外で展開中。2022年より福島県浜通りで地元のサーフコミュニティと共に「3月11日に波に乗ろう」を共同主催。近年、これまでの活動を「空気の芸術」として、振動、粒子、呼吸というカテゴリーに基づいたアーカイブ実験をレシピの形式に基づいて進めている。

<http://mhrs.jp>

<https://www.facebook.com/mhrschr>

https://x.com/mhrs_chr

<https://www.instagram.com/miharasoichiro/>

薬王寺 太一



1975年 東京生まれ、横須賀在住。関東学院大学文学部社会学科卒業。土・火・水・木・気、人の手を介して産み出される陶に魅力を感じ創作活動を始め。国内の窯元、イタリア、リトアニアにて創作・築窯。プリミティブで普遍的な表現を求め縄文に傾倒。2018年～HIRAKU(田浦)を拠点に田浦の土と三浦半島の間伐材等を用いて土器、穴窯による陶器を制作。

<https://taichi-yakuoji.com/>

<https://www.facebook.com/spazio.arterra/>

https://www.instagram.com/taichi_yakuoji/

山本 愛子



1991年神奈川県生まれ、京都府在住。東京藝術大学大学院先端芸術表現科修了(2017)。ポーラ美術振興財団在外研修員として中国にて研修(2019)。これまでアジアを中心とした国内外で、自然環境と染織技術にまつわるフィールドリサーチと滞在制作を行ってきた。そこから見えてくる土着性や記憶の在り処を主題とした作品を制作している。

<https://aikoyamamoto.net/>

https://www.instagram.com/aiko.yamamoto_/

追加参加アーティストは決まり次第順次公表

パフォーマンスアーティスト

asamicro



撮影：前谷 開

ダンサー。10歳の頃からHIPHOPダンスを学び、キレのある動きと猫背、中毒性ある振付が特徴。egglife主宰。コンセプトは“明日の朝の期待をつくる”とし幼少期の経験や記憶をもとに、言葉にならない感情や生きづらさをユーモアな動きとスピーディーな展開で提示。《家族と社会と自身の距離》をテーマに踊りを創作する。

<https://www.asamicrodance.com/>

<https://www.facebook.com/asamicro>

https://www.instagram.com/egglife_asamicro/

梅川 壱ノ介



Photo : Leslie Kee

大分県日田市出身。東京バレエ団、歌舞伎俳優を経て、2016年に日本舞踊を基本とする舞踊家に転身、師匠は人間国宝坂東玉三郎氏。現在、日本航空JAL全線で放映されている降機ビデオに出演中。2023年、障がいのある子どもたちのスクール、アヴニールスクールの理事長に就任。日本舞踊を通して、さまざまなジャンルと共演し、新しい可能性を切り拓いている。

<http://umekawaichinosuke.jp/>

<https://www.instagram.com/umekawaichinosuke/>

オル太



撮影：百頭 たけし

ヴィジュアルアート／パフォーマンスの制度との折衝、社会的／民俗学的フィールドワークを重ね、絵画、インスタレーション、映像、パフォーマンス、演劇など、様々な手法を用いて活動を展開する5人組のアーティスト集団。メンバーは井上徹、斉藤隆文、長谷川義朗、メグ忍者、Jang-Chi。

<https://www.olta.jp>

https://x.com/olta_jp

https://www.instagram.com/olta_play/

寺尾 紗穂



撮影：竹之内 裕幸

2007年アルバム「御身」でデビュー。ドキュメンタリー「Dear にっぽん」(NHK)のテーマ曲に「魔法みたいに」が選ばれ、教科書『高校生の音楽I』(教育芸術社)にも同曲が掲載。近作「余白のメロディ」は『ミュージック・マガジン』の2022年の年間ベスト(ロック部門)10枚に選出されている。

<https://www.sahoterao.com>

<https://www.facebook.com/sahotera>

<https://x.com/sahotera>

<https://www.instagram.com/sahoterao>

灰野 敬二 蓮沼 執太



撮影：池谷 陸

2017年、灰野敬二と蓮沼執太ははじめてパフォーマンスを共にする。2019年、蓮沼が主催する音楽祭『ミュージック・トゥデイ・京都』に灰野が出演。2021年、パンデミック最中に渋谷WWWではじめてのワンマン公演『うた』を開催。2023年、横尾忠則現代美術館でのコラボレーション・コンサートを成功におさめる。

<http://www.fushitsusha.com/>

<http://www.shutahasunuma.com/>

https://www.instagram.com/shuta_hasunuma